

2015年度 国際文化学部 研究旅行奨励制度 報告書

多文化社会における民族アイデンティティ

—シンガポールと香港の現地調査から—



国際文化学部 国際文化学科 17AR063 春日杏理

目次

- 目的地
 - 研究目的
 - 研究旅行日程
 - 研究成果
 1. はじめに
 2. 日本人から見た香港とシンガポールのイメージ
 3. シンガポールアイデンティティー
 4. 香港アイデンティティー
 5. まとめ
 6. おわりに
-

【目的地】

シンガポール、香港

【研究旅行の目的】

香港とシンガポールはそれぞれイギリスの植民地であったが香港は1997年に中国へと返還、シンガポールは1963年にマレーシアに返還され1965年にマレーシアから独立した。両国ともイギリスの植民地であったという共通点があるが、文献を読むとほかにもこの2都市に共通することが4つある。①多民族社会であること②商業都市としての単一機能都市③脱民族的な国際都市④使用言語に英語があるという点である。

今、グローバル化が世界各地で叫ばれている中でグローバル化をしていくと文化が多様化していくというメリットもあるが、国の独自性が破壊されアイデンティティー・クライシスが起きてしまうというデメリットもある。日本では近年では日本独自の文化の中に世界中の文化が流入し、特にアメリカ文化が大量に流入したことで、アメリカナイズされた日本人も現れるようになった。その中で、私は、専門演習や授業を受けたときにグローバル化していく社会で、多民族で成り立っている国の人々はどこにアイデンティティーをもっているのかに興味を持った。そこでこの研修旅行で実際に現地へ赴き、この共通点多い2都市を現地住民に自分たちのアイデンティティーがどこあるのかをアンケートとインタビューをもとに調査し、目で確かめ、考察することが目的である。

現地調査に行く前に、日本人は香港の人々・シンガポールの人々を何人だと考えているかについてアンケート調査したうえで、現地住民と私たちの認識の違いも調査した。

【日程】

・シンガポール

		滞在地	行動内容
1日目	8月30日	福岡—シンガポール	出国日 シンガポール到着 ・プラナカン博物館
2日目	8月31日	シンガポール (マリーナ地区)	・アジア文明博物館 ・SMU (シンガポール経済大学) の学生にインタビュー兼アンケート調査
3日目	9月1日	シンガポール (アラブストリート・リトルインディア)	・アラブストリート、インディア地区周辺でアンケート ・スリ・マリアマン寺院
4日目	9月2日	シンガポール (チャイナタウン・セントーサ島)	・チャイナタウンでアンケート調査 ・セントーサに移動し、シロロ砦へ
5日目	9月3日	シンガポール—福岡	・ラッフルズホテル 帰国日

・香港

		滞在地	行動内容
1日目	2月24日	福岡—香港	出国日
2日目	2月25日	香港	・街頭アンケート ・香港歴史博物館 ・香港海事博物館 ・女人街周辺での街頭アンケート・インタビュー

3 日目	2 月 26 日	香港（香港島）	・ Hong Kong Park での街頭アンケート・インタビュー ・ 茶具博物館 ・ セント・ジョーンズ教会
4 日目	2 月 27 日	香港—福岡	帰国日

【研究成果】

1. はじめに

現代の日本では多くの異文化の大量輸入により、愛国心や日本人であるという意識が希薄になってきている。日本のように1つの民族で構成されている国は他にもあるが、特に隣国である大韓民国は愛国心の強い国の1つで、日本とは違う、アイデンティティ意識の強さが感じられる。これは民族性や宗教性の違いによりこのような意識の差が表れていると思われるが、しかし世界には一民族構成ではないアメリカやシンガポール・香港のような多文化・多民族で成り立っている国もある。アメリカではかつて民族性の違いにより黒人差別やアジア人差別が存在したことが歴史として残っている。

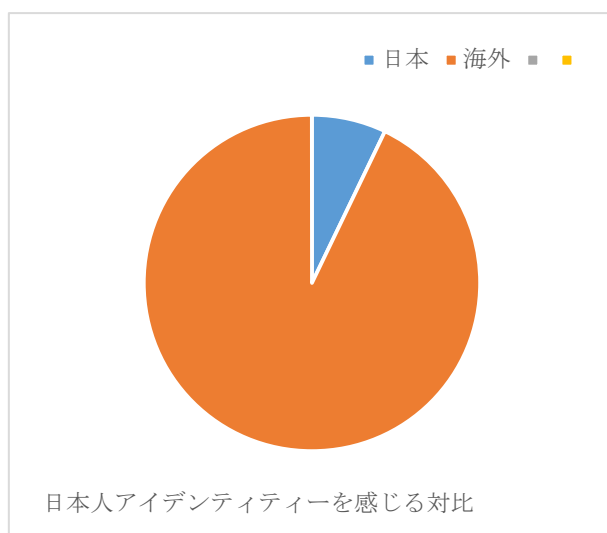
アメリカとは全く違った文化をもつアジア圏にあるシンガポールは民族との兼ね合いがうまくなされているとよく言われるが、実際どうなのだろうか。イギリス植民地であった過去を持つ、シンガポールと香港に注目し、シンガポールの人々、香港の人々が言語や文化が違う中でどこにアイデンティティを持っているのか、どのように共存しているのかについて、歴史・文化・現地の人々の生の声をもとに考察していく。

2. 日本人から見た香港・シンガポール

香港・シンガポールは近年観光地としても人気のスポットである。旅行会社でのパンフレットや旅行本に掲載されている2都市は商業要素も含まれているため、戦争跡地であったことや植民地であったことを取り上げていない。知名度も上がっている2都市を日本人はどのようにとらえているのだろうか。また、日本人はアイデンティティ意識が強い人種であるが、実際日本にいて意識をするのか、どのような時に意識するのかに疑問を持った。事前調査として現地へ赴く前に、日本人を対象にアンケートを10代から50代の大学生・一般人を対象に行った。結果は以下の通りである。

質問		はい	いいえ	わからない・無回答・行ったことがない
【Q1】	日本にいて日本人であると感じることが多い	2	39	0
【Q2】	海外に行ったときに日本人であると感じることが多い	26	1	4
【Q3】	シンガポール・香港の人々は1つのアイデンティティーを持っていると思うか	12	29	0
【Q4】	シンガポール・香港がかつてイギリス植民地であったことを知っているか	3	38	0

(対象調査人数：41人)



アンケートの結果により日本人は日本にいるよりも海外にいるときのほうが日本人としての意識が表れることが分かった。日本にいてアイデンティティーを感じないと答えた理由として挙げられているのが

- ・海外の人と接することが普段ないためそこまで日本人だという感覚がない
- ・クリスマスを祝ったり正月にはお宮参りにも行ったりするので日本人はこれを

をするという固定概念がないから日本人と感じる人が少ないのではという回答があった。

日本は諸外国と違い多宗教の人が多く、そのためアメリカやヨーロッパ圏、韓国のように宗教を一つ信仰している人々が多い国に比べてアイデンティティー意識が希薄であると考えられる。また、海外に行ったときのほうが日本人としてのアイデンティティーを感じる人数が多いことに関しては

- ・海外に行くとかツアーで行ったりするので、どうしても言葉が通じない言語の人を避けて日本人とかかわってしまう
- ・日本人を探すと安心する

・海外の人と触れ合ったときに文化の違いや習慣の違いを感じたときに感じる
という回答が得られた。このことにより、日本人は比較的民族間で固まってしまう民族性があり、普段は日本という 1 民族で構成されている国で暮らしているからこそ、海外に赴いたときに多民族性の強い国でアイデンティティーを感じる人が多いのだろう。

では次に日本人が感じるシンガポール・香港のアイデンティティー観とはどのようなものかについて述べていく。Q3により、それぞれの民族が 1 つのアイデンティティーを持っていると考えている人は少ない結果となった。理由として、

- ・特にシンガポールは地域によって民族系統が違うので、1 つのアイデンティティーで固められていないと思う、その民族の親切さなどからそのように感じられる。
- ・移民の人は生まれた国が違うので、シンガポール人である、香港人であるという型にあてはまっていないと感じる

という回答があった。以上より、日本人から見た 2 都市のアイデンティティー観とはそれぞれの民族が画一的なアイデンティティーをもっていないイメージ。つまり、各々の都市に住む人々はその民族性に応じた自己帰属意識を持っているという認識だとわかった。また、それと同時に同アンケート上で、シンガポールと香港のイメージを聞いたところ、両国とも中華系の民族が多い、”中国のような感じ”や近年シンガポール・香港は観光旅行で有名になってきて、富裕層が多いといった回答を得られた。大学生の中には、名前は知っているが場所がどこにあるのか知らないという回答があり、日本人が感じるおおまかなイメージとしては、シンガポールは先進国、潤っている国、香港は、中国に似たような国というイメージを持っている人が多く、Q4の結果より 41 人中 3 人しか植民地であった歴史を知らず両国ともイギリス領であった歴史を知っている人は少ないという結果にもつながった。

では、実際には現地に住む人々は、どのようなアイデンティティーをもっているのだろうか。

3. シンガポールアイデンティティ



〈シンガポール民族構成の概要〉

シンガポールの民族構成は華人 77%、マレー人 15%、インド人 7%、その他 1%となっている。しかし、これは政府による公式の分類であり、実際にはシンガポールの民族構成はより多様で複雑になっている。現在シンガポールには実に 33 もの言語が存在しており、これらの 33 の言葉を話す人々が政府により言語学的、人類学的、地域的な根拠のもとに、四つに分類されたのが実

状である。また、シンガポールには土着の民族というものが存在せず、ほとんど全てが移民の子孫である。このことは隣国のマレーシアとは決定的に異なる点であり、言語政策を困難にした大きな要因である。¹

以上の民族構成をもとにシンガポールでは、マリーナ地区周辺とアラブストリート、リトルインディア、チャイナタウンに調査区域を細かく絞って調査を行った。また、10代～20代の世代に関しては、日本でも大学生中心にアンケートを取ったため、その違いを比較するためにも現地の大学生をターゲットとして、SMUの学生 15 人にアンケート・インタビューを行った。

質問	はい	いいえ
(Q1) 住んでいて自分の宗教・民族性の違う人とのコンフリクトはあるか?	9	46
(Q2) 自分の民族系統のアイデンティティ意識を感じるか?	26	29
(Q3) シンガポール人としての意識はあるか?	35	20

(対象調査人数：55人) 図1

¹ 藤田 剛正 『アセアン諸国の言語政策』 法律文化社 2009年

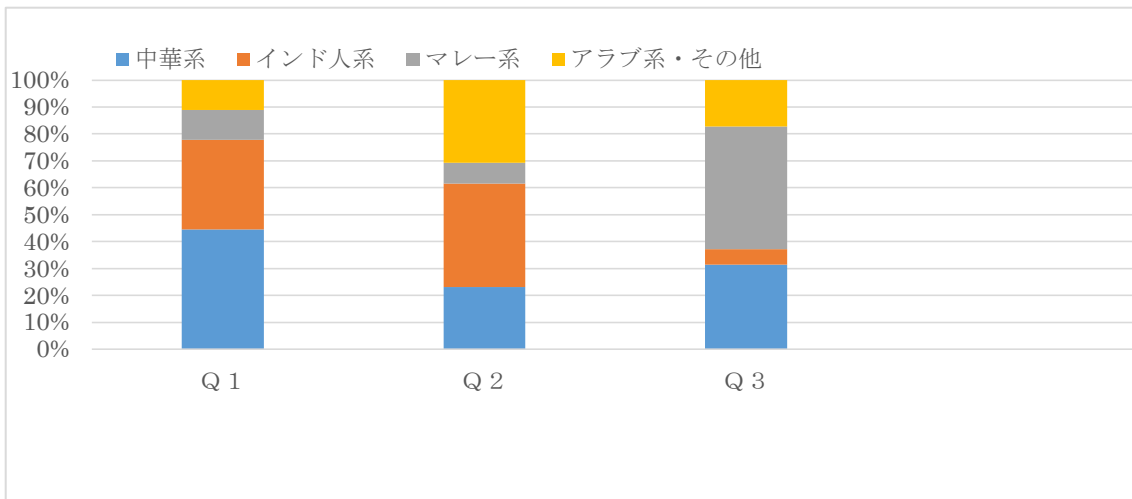


図2 (“はい” と回答した系統別内訳)

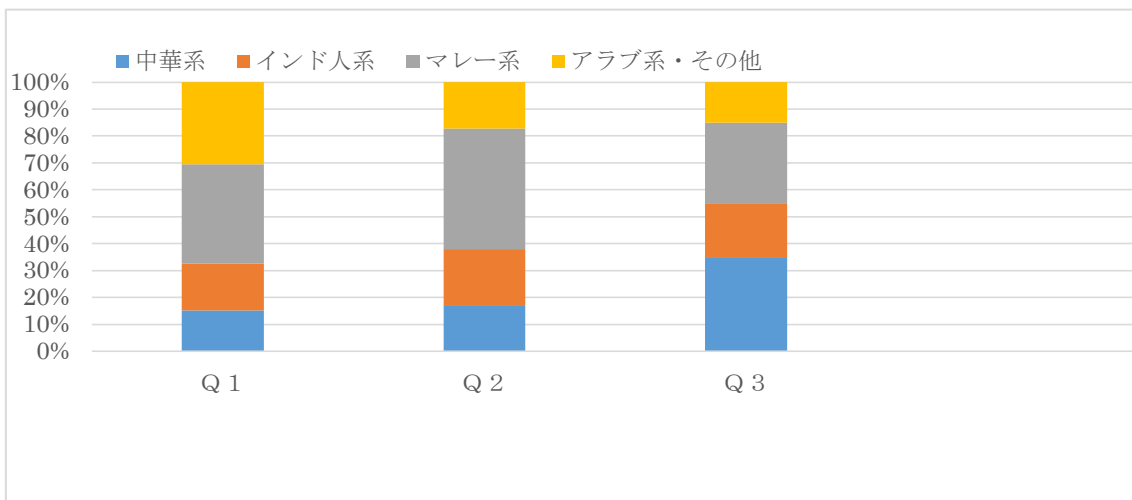


図3 (“いいえ” と回答した系統別内訳)

本国ではそれぞれの地区で合計人数 55 人にアンケート調査を行った。図 1 は質問ごとに集計した調査結果、図 2・図 3 は民族ごとに分類した結果となっており、文献の民族構成に準じて中華系・インド系・マレー系・アラブ系/その他に区切った。

調査結果から考察できることは、民族ごとの宗教のちがいによりアイデンティティーの感じ方が違うということである。インド系とアラブ系の人々の信仰宗教は主にヒन्दウー教・イスラム教で、もともとインド圏やイスラム圏に住んでいて家族の仕事の事情や戦争・就学などの理由により移住してきた方が多く、母国で信仰していた宗教を代々受け継いで信仰しているため母国のアイデンティティー意識を感じている人が多い。図 2・図 3 からみてもわかるように Q 2 の割合はインド系・アラブ系が占めていることがわかる。しかし、信仰宗教があるがゆえに他民族とのコンフリクトはあまりないように感じられる。図 1 の Q 1 を見たときに多くの割合を占めているのは中華系であり上記に挙げたような宗教色が

強い民族の割合は少ないという結果が出た。中華系民族の信仰宗教は様々で仏教、キリスト教、無宗教などであった。そのため、宗教に一貫性がないためにうまく相手の考えや価値観を受け入れることがほかの民族に比べて難しい民族性を持っているのではないかと考えられる。しかしながら、中華系も年代別で分類すると、60代から80代の方々がそのような傾向が強いように感じられる。10代から20代の大学生の意見によると、若い世代は出身国がシンガポールであり、同世代にも様々な民族系統の友人がいるため相手の意見を受け入れることはできるとのことであった。このことにより、戦争を経験している世代や戦後間もない世代の人々は比較的他民族との衝突が多く、シンガポール生まれの若い世代は民族系統のアイデンティティーも大切にしつつ他民族のアイデンティティーを受け入れられる傾向があると考えられる。

対して今回の調査で最も意見を多く聞くことができたマレー系の人々は、どの世代に聞いても、民族の違いにより違和を感じることは、少ないと回答してくださった方が多く、シンガポール人としての意識が一番強い民族系統であることがわかる。

4. 香港アイデンティティー



〈香港の民族系統概要〉

香港には約600万人が住んでいる。全人口の95%を中華系が占めており、フィリピン系1.6%、インドネシア系1.3%、その他（移住者）2.1%で構成されている。¹現在、香港に住む約300万人が香港生まれの香港育ちの香港人であるといわれている。²

¹ The World FACTBOOK

<https://www.cia.gov/library/publications/resources/the-world-factbook/geos/hk.html> 参照

² Central Intelligence Agency

<https://www.cia.gov/offices-of-cia/intelligence-analysis> 参照

質問	はい	いいえ
(Q 1) 住んでいて自分の宗教・民族性の違う人とのコンフリクトはあるか？	6	5 2
(Q 2) 自分の民族系統のアイデンティティ意識を感じるか？	4 3	1 5
(Q 3) 香港人としての意識はあるか？	5 1	7

(対象調査人数：58人) 図4

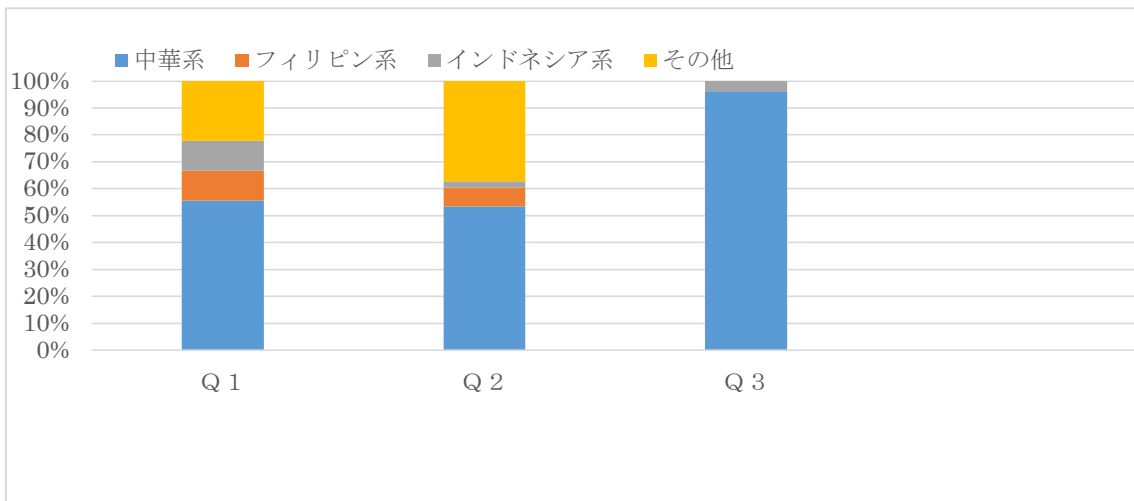


図5 (“はい”と回答した系統別内訳)

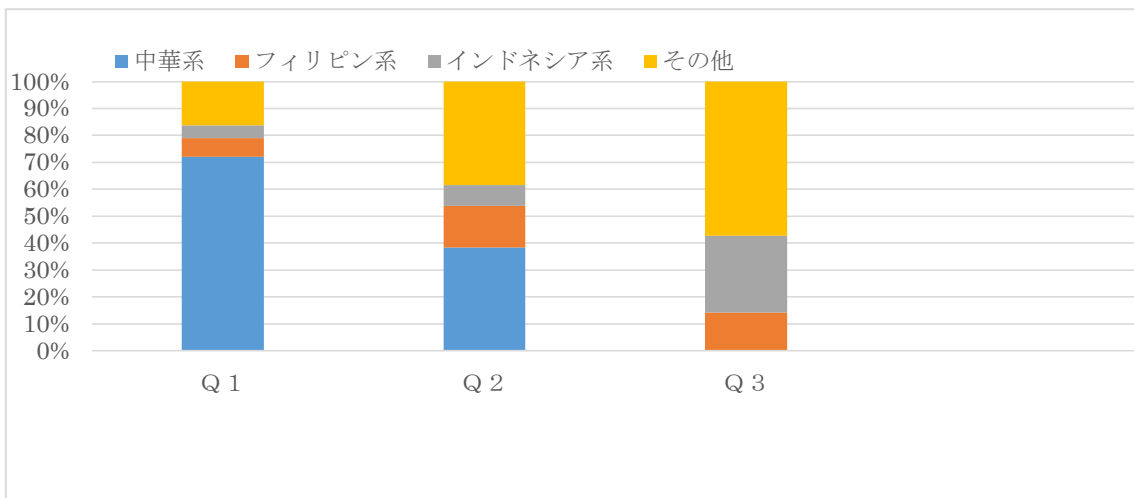


図6 (“いいえ”と回答した系統別内訳)

シンガポール同様にアンケート調査とインタビューを行った。香港では九龍地区（尖沙咀・梳利士巴利・広東道など）香港島地区（荷李活道・銅鑼湾・上環・中環など）周辺で58人に調査を実施した。（なお香港では、大学へのアポイントが取れなかったため若者が集まる旺角などで調査を行った。）

香港は多くが中華系民族で構成されており、調査で明らかになったのは、中華系民族を除く民族は移住者である人が多いため、自国のアイデンティティー意識を感じる人が多い結果となった。また中華系民族は自らのことを”Chinese”（中国人）ではなく、“Hong Kong people”（香港人）または中国人であるが香港人でもあると述べている人が多かった。香港は1997年に中国に返還され、実質、中国の領土とはなっているが、150年以上イギリス植民地であった歴史があったため、中国人という意識より香港人としての意識が強いように感じられた。その他の民族についても、文献の統計的にはフィリピン人やインドネシア人が多いとのことだが、露店を経営している人や街を歩く人を見ても多くは中華系であるため、他民族に出会うことがなかなかできなかった。しかし、出会ったフィリピン系やインドネシア系民族も香港人としてのアイデンティティーではなく母国民族としてのアイデンティティーを持っていた。

5. まとめ

シンガポールと香港の結果を比較してみる。まず両国の類似点は民族コンフリクトの少なさである。調査によりシンガポールのほうが香港より多民族国家であることが分かった。しかし、民族系統が多いからと言ってコンフリクトが起こる差があるわけではなく、お互い自分の文化・宗教を尊敬しつつ、他民族の文化・宗教も受け入れていた。シンガポールは香港同様に主に中華系民族が人口の割合を占めており、それ以外の民族はほとんどが移民で少数民族となってしまうため、そのまま野放しの状態では虐げられたり、住みにくい土地になってしまったりしてしまう。そのためシンガポール憲法では少数派民族も快適に暮らすことのできるように、少数派の権利保護が規定にも組み込まれている。そのため、どの民族も住みやすい国となっているのではないかと考えられる。同じく香港も、そのような規定はないものの、シンガポールよりも多い95%を中華系が占めていることからこのように民族間衝突が少ない結果となったことが考察される。

参考文献

- 中村 都『シンガポールにおける国民統合』 法律文化社 2009年
藤田 剛正『アセアン諸国の言語政策』 アジア文化叢書 1993年